

開花したばかりの枇杷の甘い薫りがふと鼻元を掠め、私はまたこの季節の訪れを実感する。北風に煽られるその姿形をじっと眺めていると、彼もまた、身を刺す様な初冬の木枯らしにコートを揺らしている私の事を、そんな気持ちで眺めている気がする。人と風物詩は、出逢いの瞬間だけその年の季節感を共有出来るのだ。

風の音の転調を合図に、私は再び足を進めた。まだまだこの薫りを堪能したいけれど。大好きな枇杷に魂を委ねてしまいたいけれど。知り合いの薬局で薬を受け取り、すぐに先生の待つ千登勢駅に向かわねばならなかった。ここから駅までは一本道とは言え、狭細い未舗装の路地を二キロも突き進む必要がある。皮肉なことに、私は自動車にも自転車にも乗れないのだ。自転車は補助輪をつければ何とか前に進めるが、時折バランスを崩して転倒する。亡くなった父母も祖父母も乗れなかった。車には代々縁の無い家系だ。この自慢にならない遺伝は子供の頃から周囲の笑いの種だった。しかし悔しくなど無い。己の身体さえあれば、海でも山でも、月にだって行けるのだから。

すつきりと葉の落ちた木々の群れの中を、私は足早に進む。時計を気にしながら、まだ間に合う、やっぱりもつと早く出れば良かった、といったやり取りが十分も前から心の中で続いている。こういった思考が張り巡らされるのはまだ余裕がある証拠かも知れない。師走とはその名の通り、人の心を必要以上に慌てさせる季節である。

並木道を抜け一段落ついた所に、ちょうどその薬局があった。江戸時代から建っているのではと思わせる瓦屋根の菱びた一軒家。白く「梧桐薬局」と書かれたその薬局の硝子戸を、私は躊躇無く開いた。一声掛ける必要も無い。決まった日決まった時間に客はこの局を訪れ、決まった薬をただ受け取って帰るだけだ。

中は思いの他暖房が効いていて気持ち良かった。流石に薬品を扱うだけあって、小汚い外装とは打って変わった清潔感が漂っている。箱や瓶が所狭しと並ぶ六畳ほどの店の奥に、この薬局の主は居た。私の勤めている出版社の編集長にとってもよく似ていて、頑固親父といった風貌の老人が競馬新聞を読みながら、こちら向きにふんぞり返っていた。白衣も着ず、残り少ない髪を時々手で弄びながら、自分の趣味に集中している様子だった。私と目が合って、彼は少しだけ眼鏡を持ち上げてみせた。私は小さく頭を下げる。それが二人の間でいつの間にか成立している暗黙の挨拶だった。

「楠木さんのはいつも通り、そこだ」

主人は囁かれた声で、入り口近くの棚を指差したが、私は既にそちらに目を向けようとしていた。私のフルネームが表の看板と同じ筆跡で書かれた小さなケースが、棚の上段、ちょうど私の背丈と同じ高さの位置にぼつんと置かれている。

「間違えないように。間違えたら、天国行きやぞ」

一瞬ドキッとした。主人がこんな軽口を叩くのは珍しい事だ。鬣屑の馬が勝っているのだろうか。私は軽く微笑みながら、箱に手を伸ばした。

「もうすっかり冬ですね」

私は箱の中身を確認しながら、彼に話しかけた。「そうだ、ここに来る途中の道で、枇杷を見かけましたよ。坂牧さん家の庭。もう凄くいい匂いがして……。実が成ったら是非頂きたいですよ。枇杷、お好きですか？」

そう問いかけられた主人の反応に少し期待したが、彼は微かに頷いただけでまた競馬新聞に目を落としてしまった。無愛想なのは毎度の事。こんな事で気を悪くしたりはしない。

それでも私がこの主人とコミュニケーションを図りたいと思うのは、少しでも彼の情報を引き出したいからだ。人がどの様に生まれ育ち、どの様に生きているのかという事に興味がある。特に彼のようにミスティアスな雰囲気醸し出した人物には。出逢ってから三年も経つと言うのに、未だに出身地も年齢も分からないこの老人について、一つでも情報を得たかった。

注文していた薬は正しいので、私は箱をハンドバッグに仕舞い、代金を主人の前に静かに置いた。老人は無言でそれを掴み取り、眼鏡の真ん中を持ち上げてみせた。この仕草は見た事が無い。ありがとうございましたのポーズ？ それとも金額は合っているよというジェスチャー？ 主人は鼻をすすりながら新聞をめくる。やはり上機嫌なのかも知れない。これ以上新しい収穫は得られそうに無いので、私は礼を言い、店を出た。温かな空気が解放され、また重たい風が身体になだれ掛かる。それでも私はこの地の、この冬が大好きだった。

少しペースを上げ、千登勢駅を目指す。先生に逢うのは今日が初めてだった。大手出版社でアルバイトをしていた私が春からの研修期間を終え目出度く正社員となり、その初仕事として先生の編集者に抜擢された。私を取り立てて有能であった訳では無く、先生の元の編集者が寿退社をし、ただその空席に着いたというだけに過ぎない。そしてもう一つの理由は――。

「楠木くん、楠木くん。ちよつといいかい？」

一週間ほど前、大柄の編集長が新しいデスクの整理をしている私の名を呼んだ。ピカピカに磨き上げられた眼鏡の奥から、大きな目玉がぎよろりと覗いている。同僚から弁慶という渾名が付けられているが、私はそれより仁王像の方が近いと思った。

「はい。何でしょうか？」

「君って確か、千登勢に住んでるんだよね？」

予想外の質問に少し私は戸惑った。まさかこっちに引越して来いと言うんじゃないだろうな、と思わず勘ぐって肩を竦める。私の住んでいる千登勢は、出版部のあるこの都心から電車で片道二時間の距離にある。幼くして両親を亡くした私を引き取ってくれた叔父夫婦の住むこの地に留まりたいという想いや、交通費が会社負担という事もあり、ずっとこの往復を続けている。

「ええ……」私は動揺を押し殺し、頷きながら答えた。

「そうかそうか」

編集長の顔が一瞬綻んだ。いちいち二度繰り返すのは彼の癖だ。質問の意図を尋ねる前に、彼の表情はまた元に戻った。

「それじゃあさ、菜倉にはよく行くの？」交通手当に関する相談では無さそうだった。

菜倉は千登勢よりも更に二時間列車に揺られた先にある温泉街で、主に五十代以上、編集長ぐらいの年齢層に人気のある物静かな観光地だ。都心から千登勢までの鉄道は計三回の乗り換えが必要だが、菜倉までは千登勢を経由する鉄道一本で行く事が出来るため、よく叔父夫婦に連れられて出掛けたものだ。

「最近は何多に行きませんか、昔はよく……。編集長、菜倉に行かれるんですか？」

「いやいや、私は……」彼は大袈裟に両手を振る。まだまだ菜倉温泉を嗜むような年齢で

は無いよ、と言いたげだった。

「恥ずかしいが事無いじゃありませんか。たまには仕事を忘れて、都会の喧嘩から離れたりして、ゆったり温泉に浸かると言うのも素敵ですよ」

緊張感がほぐれたせいも、調子に乗って随分年寄りじみた事を言ってしまった。今年成人式を迎えたばかりだと言うのに。

「いや、本当に私が行くんじゃ無いんだよ。先生が行きたいと仰っていてね」

「先生？」

「作家の姫川先生だよ」

「姫川……」

私はインパクトの強いその苗字だけで、些か興奮を覚えていた。「もしかして、あの、姫川美幸先生ですか？」

「そう」編集長は二度頷いた。「別に温泉地を舞台にした旅情サスペンスでも書こうって訳じゃ無いが、私と担当の者と三人で食事をしていた時、菜倉の話が出てね。是非行きたいと話されていたんだ。君も知つての通り、姫川先生が帝東新人賞を獲つてからのこの二年間、数多くの出版社が先生の作品を我が物にしようとして躍起になったものだ。結果、我が社からは三冊の作品を発刊する事が出来た。これはひとえに我が編集部の方の努力の賜であり……」

話が脱線しかけたので編集長はゴホンと咳払いをし、我に返った。

「つまり、平たく言えば先月我が社で出した先生の著書『モーツァルトに恋して』の大ヒットを祝つて、一泊二日温泉旅行に招待してやろうと、まあこういう事だね。もともと、表向きはあくまでも取材旅行という名目だ。上がうるさくてね……」

編集長は人差し指をピンと立てて、上下に振った。

「取材旅行という名目である以上、担当者が同行せねばならない。そこで、菜倉に詳しい君に同行して貰いたいんだが……」

「私が、ですか？」

思いがけぬ大役に抜擢され、私はしばらく言葉を失った。実の所、私は姫川美幸という女流作家が帝東新人賞を受賞したニュースを、女性週刊誌で読んだ程度の知識しか持ち合わせておらず、彼女の作品など全く読んだ事も無かったのだ。

年は確か三十二歳だったと思う。美容院の待合で雑誌を読みながら、私よりちよんど一回り上かあ、凄いなあ、と独り言を呟いたのを記憶している。オールカラーの見開きページに華々しく飾られた彼女の近影は、大賞を受賞してはしゃいでいるといった様子は無く、むしろ無表情でクールな印象を受けた。

千登勢駅に着いたのは、私が葉を受け取ってからおよそ二十分後だった。昔から体力には自信があったので、一時間や二時間歩き詰めでも決して息を切らせたりはしない。プロの担当者と言うものは、作家先生を前にしていつも毅然としていなければならぬらしい。

田舎だがこの駅は無人駅では無い。一度無人化が検討された事があるが、この街からの菜倉への観光客が予想以上に多く、結局廃案になったと聞かされた。改築するほどの収益までは上げられていないので建物は昔から変わっていない。

毎日同じ駅員が同じ場所に立っている。彼はきつと私が生まれる前から働いている。構

内を行き交う客だけが成長し、働く人々は変わらぬまま。ここに住めば無限の時間が与えられるのか。この空間だけは時間が止まっている気がしてならなかった。

先生は都心から三回の乗り継ぎを経て、つまり私の毎日の帰宅コースを使ってこの駅に来る段取りになっている。駅員と軽い挨拶を交わしプラットホームに降り立つと、私は先生の姿を探した。

午後四時四十五分発、菜倉行き最終列車を待つ客はこの日に限って多くなく、老夫婦が二組、大きな風呂敷包みを持って突っ立っているだけだった。

おかしいなと思いつながらホームの先端の方、つまり一号車が到着する辺りに目をやると、すらりと背の高い女性が立っていた。雑誌で見たままのクール美人は、栗色をしたストレートのショートヘアを靡かせながら、ぼんやりと線路側を見つめていた。そちらへと近付く私の視点は彼女の服装を捉えていて、俄に観察を始めている。真っ白なダッフルコートはしっかりと前で留められている。スカートは今の私と同じ黒色、ロングブーツはチョコレートのような焦茶色。今の私の服装と大差無く、それだけで何となく親近感が湧いた。むしろ先生の方が若々しいファッションをしているかも知れない。

「先生！ お待たせしてすみません！」

私は手を振りながら、勢いよく彼女に駆け寄る。少し声を大きく出し過ぎただろうか、先生はハツとした表情で私を凝視する。

「あら」先生は私の顔を見て少しだけ目を大きくする。「女性の方だったのね」

「は、はあ」思わず懐から名刺を取り出そうとしていた私の手が止まる。

「ごめんなさい、何でも無いの。気を悪くなさらないで」

「もしかして、編集長からは男性が来ると聞かされていたのでしょうか？」

私は瞬きを繰り返しながら先生に尋ねた。先生は口元に手を当て「いいえ」と上品に微笑み、

「今まで担当された編集者の方が男性、女性、男性、女性と交互だったので、今度は男性かしらって、そんな予想をしていたの。つまらない事でしょう？ ごめんなさい。いつもの癖で、つい規則性を掴んでしまうの」

「ご期待に添えずすみません」私は苦笑いを浮かべる。

「いいえ。むしろ法則を乱される事は大歓迎。世の中、思い通りにいかない方が面白いもの」先生は悪戯っぽい笑みを浮かべると、皮の手袋を外した右手を私に向けて差し出して「佐伯出版の楠木智美と申します。はじめまして」

「佐伯出版の楠木智美と申します。宜しくお願いします」

旅立ちを予感させる停車音が、夕刻のプラットホームに澄みやかに響き渡る。

セピア色の列車は定時に到着した。夕焼け空が硝子窓に乱反射し、刹那ノスタルジイな感覚に包まれる。二組の老夫婦は軽快な足取りで、ひょいと列車に移っていた。表情はここからはよく見えないが、彼らの愉しげな顔が目に浮かぶ。

先生は興味深そうに列車を一瞥した後、中へと足を踏み入れた。

その後に私も続く。

一号車は喫煙車両だが、煙どころか人影すら見えない。そう言えば今日は木曜日だった。この列車が賑わいを見せるのは大概、連休初日か土曜日の事で、平日の喫煙車両などは特

に貸し切り状態に近い。

「あっ、先生、この席にしましょう。こっちの景色の方がお勧めなんですよ」

私は西側の席の一つを指し示した。この車両の席は通勤電車でよく見かける七人掛けのシートでは無く、進行方向と逆方向がお互い向き合う席となっている。先生はコートを脱ぎ、逆方向側の席に着きながら、手慣れた感じで膝の上に折り畳んで載せた。上着は黒のセーターだった。先生に倣い、私も丁寧にコートを折り畳み、膝に載せる。一息ついた所で発車のベルが鳴った。

「夕焼けが綺麗だわ」

列車が動き出す。次々と移りゆく茜色の風景を先生は目で追い続けている。その表情が驚くほど優雅で、凛々しくて、絶好のシャッターチャンスだった。

「本日の宿泊先はSホテルです。私と先生で別々の部屋をお取りしています。かなり広い部屋を予約しておきましたので、存分におくつろぎ下さい、と言うのが編集長からのお達しです」

話していて、社長秘書の様な気分になる。

「私は何よりも、温泉が楽しみ」

「先生は、温泉にはよく行かれるんですか？」

「以前、草津に一度だけ」

先生は視線を天井に逸らす。「友達と旅行でね。でもその時の私は羽目を外して酷くお酒に酔っていたせいで、温泉に浸かった記憶はあまり無いの」

「それじゃ、菜倉が初めてみたいなものですね」

「そうね」先生は微笑んだ。「温泉に入るまで、お酒は抜かなくっちゃ」

車窓には長閑な田園風景が映っている。広大な茶畑を見て、私は思い出した様にハンドバッグから魔法瓶を取り出した。

「お茶は如何ですか。ホットですよ」

「ありがとうございます。頂くわ」

「まだまだ先は長いですからね。思いつくりリラックスしちゃいましょう」

カップに注がれたお茶は出掛ける前に用意した物だが、未だ温もりは衰えていない。淡い湯気の昇りを感じながら、私の視線は再び先生の表情に戻る。

どちらかと言うと日本人離れた顔立ちだ。私の知る他のどの有名人にも似ていない。大きくて円らかな瞳は魅力的だけれど、潤いを帯びた細い唇の方が私にとって印象的だった。なるほど、確かに作家と言うよりはモデルか女優向きかも知れない。実際に本人を前にしてみると、がらりと印象が変わるものだ。

「ゴーストライター？」私は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「しっ、声が大きいわよ」

とは言え周りの客の笑い声の方が遥かに喧しく、誰に聞かれている筈も無いのだが、先輩は厳しい目つきで私を睨んだ。菜倉に旅立つ前の日、寿退社の先輩を祝うため、居酒屋で飲んでいた。

私より二つ年上のこの先輩は、ついこの間まで姫川先生の編集者だった。明日先生と共に菜倉温泉に行くのだと話すと、先輩は突然険しい眼差しを私に向け、こう言った。あの

人にはゴーストライターの噂あり、と。

「それは確かなんですか？」私は先輩の耳元に囁いた。

「うーん、だからね、あくまでも噂なんだったば」

酒豪の先輩は、今ビールが注がれたばかりのグラスをあつという間に空にした。

「先生の顔は知ってる？ どう見たってモデルか女優って感じの美形でしょ？ そりゃあさ、別に美人が作家やっちゃ駄目って事は無いけどさ、さすがに限度があるわよ」

「そうかなあ」

「あたしがもし姫川美幸の友達でさ、彼女が小説書くって言い出したら、きつとこう言うわね。やめときなさい、そんな陰気なショーバイ。あんたは華があるんだから、モデルになりなさい。背も高いんだし。その方が天職よ」

「私は、容姿で職業を選ぶ事はしたくないなあ」

「馬鹿ね。この世の中、容姿イコール職業に決まってるじゃない。太ってる男の子には将来相撲取りになりなさい。絵に描いた様な美少年にはジャーナリズム事務所に入りなさい。地味な女の子には将来事務職に就きなさい、ってカンジね」

「じゃあ、私は？」

「天職、編集者」

「何だか微妙ですわね、それ」私は枝豆をつまみながら渋い笑顔を浮かべる。

「まっ、私も先生がゴーストライターなんて噂は信じちゃいないんだけどさ。そりゃーデスクに向かっている所は直に見た事無いし、作品に対して深く対談した事も無いわよ。でも何て言うのかな、あれだけ美人だと、そういう噂を流して足を引っ張りたくなる人の一人や二人、どこの世界にでも居るもんよ」

「そんなもんですかねえ」

「美人に生まれると損ってコト」

「美人薄命ですわね」私の言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか、先輩はフンと鼻を鳴らし、焼酎をオーダーした。

「あーあー、くだらない。自分達を美人じゃないって否定してるカンジで、憂鬱になる。ね、話題変えよう。あたしの旦那とのノロケ話でも聞く？」

「姫川先生って、どんな方なんですか」

「あんたねえ」先輩の眉がピクピクと動いた気がした。「ま、いいわ。教えてあげる。先生はとつても冷酷非道な人よ。覚悟しなさいね。かつての編集者が先生にコテンパンに叩きのめされて、二三年間でなんと四回も担当を変えさせられてるんだから」

「本当ですか……？」

「ウーソ」先輩はクスクスと笑い始める。

「もう、びつくりしたじゃないですか！」私は口を尖らせる。

「担当者が四回変わったって所だけは本当よ。昔は一人の作家に一人の担当者がずっと携わる事が多かったみたいだけど、今は星の数ほど居る作家を捌かなきゃいけないわけだからね。印税が入れば引越しか増えるし、あと海外への取材旅行なんかもね。担当者が頻繁に変わる事なんてザラよ」

「へえー」

「先生はいい人よ。安心しなさい。ただ少し……不思議な人だけどね」

列車は陸橋に差し掛かった。

千登勢と野瀬原のちようど境目辺りだ。日は沈み、穏やかな紫色に支配された夕闇の世界が窓の外を流れてゆく。車掌が検札に来る気配も無く、相変わらず私と先生だけがこの車両の主だ。

「楠木さんは千登勢に住んでおられるのね。出勤には交通費も時間も掛かって大変でしょう？」

「いえ、もう慣れました。乗り換えが多くてのんびりと出勤が出来ないのは痛いですけど、交通費は社が負担してくれますし、都内に住むより実はお得なんですよ」

「都内に住んだ事は？」

「一度だけあります。大学時代に友達と一緒にアパートを借りて、新宿に一ヶ月ほど過ごした事があるんですけど、やはり住み慣れた千登勢の方が、心が落ち着きます。先生はずっと都内ですか？」

「今は都内に住んでいるけど、それまではずっと海外で暮らしていたわ。帰国したのは、ちょうど五年ほど前だったかしら……」

先生はそう言いながら額の辺りをそっと指で触れ、記憶を手繰り寄せようとしている様に見えた。しかし先生は次の言葉を放たなかった。気を害してしまっただろうか。

「先生の作品、いつも楽しく拝見させて頂いています」

気分を切り替えようと、私は昨晚徹夜して読んだばかりの一冊の本についての感想を述べる事にした。

「色々ありますけど、私は先生のデビュー作が一番好きですね、『空谷の聲音』。ピアノストとチェリストの恋愛描写が斬新で、素敵で、もう感動して泣いてしまいました」

「光栄だわ」

先生は微笑んだ。「二番目に好きな作品も、是非お聞きしたいわ」

思わず私は言葉に詰まった。『スーベニア』『ノクターン・ストーリー』『機械仕掛けの天国』『時の溪谷の下で』——タイトルだけは何とか諳んじて来たものの、内容に関しては全く分からない。早まった事をしてしまった。

「……すみません、未読です」私は素直に詫びた。

「だと思った」先生は可笑しそうに言った。「何故、分かったのですか？」

先生はその問いには答えず、私の顔を柔らかな眼差しでじっと見つめるだけだった。何となく気まぎれになって、私は再び話題を切り替える事にした。

「作家デビューされるまでは、ウェブデザインの会社に勤務されていたそうですね」

これは先輩からの情報だ。「デザイン系の仕事から、突然文筆業に転向するって珍しくないですか。先生って多才なんですね」

「しかしデザイナーも作家も、いずれも芸術家という点では共通しているでしょう。ちなみに私はウェブデザイナーになる前は、ピアノを弾いていたわ」

「あっ、だからピアノのお話を描かれているんですね」

「どの芸術が一番自分に向いているのか、私自身確かめてみたかったの」

「やはり小説家としての先生が、一番向いていると思われませんか？」

「どうかしら」先生は少し首を傾げた。

列車は緩やかなスピードで野瀬原を通過する。大雪原の景色を愉しんだ後は、深い森の中へと導かれる。ここから先はしばらくトンネルが続く。

「先生、ポッキーは如何ですか？」私は鞆の中から菓子箱を取り出し、封を開いた。

「ありがとうございます」

先生はポッキーを二本受け取り、その内一本を口に入れた。

「先生にとって芸術とは、一体何ですか？」

「大切な人へのメッセージ」

この先生の即答に私は驚いた。まるで私の質問を予期していたかの様に。

「メッセージ、ですか？」

「私にとつてはピアノもデザインも小説も、全て大切な人へのメッセージ。その人のために奏で、その人のために描き、その人のために創る。でもそれがいつも傍に居てくれる人では無く、どこに居るか分からない人に対してのメッセージだとしたら？ 作品を世に送り出して有名になれば、もしかしたらその人に届くかも知れないでしょう？」

「大切な人とは、もしかして先生の恋人ですか？」

「いいえ」先生はもう一本のポッキーも口に入れた。

「でも、何だかそういう考え方、ロマンチックで素敵です」

「私もそう思う」

先生は頷いた。「あるピアニストの受け売りなのよ」

トンネルに入り、少し聴覚が狂い始めた。どうも私は昔から三半規管が強くない。一方の先生は済まし顔で、美味しそうにポッキーを味わっている。私は唾を繰り返し呑み込む事で、何とか聴覚のバランスを保った。

「……じゃあそのピアニストの方が、先生がメッセージを送りたいという大切な人なんですか？」

自分の声に違和感を抱きながらも、私は尋ねた。

「いいえ、確かに彼も大切な人ではあるけれど……」

先生は何故か照れ臭そうだった。「もっと大切な——私の命を救ってくれた人」

「お、これは何だか、良い感じの話が聞けそうじゃないですか」

私はワクワクしながら、先生の表情を窺う。「是非聞きたいです」

「それじゃあ一つ、ゲームをしましょうか」

「ゲーム？」

「貴女が勝つたらその時の事を一部始終話すわ。その代わりに私が勝つたら、そうね、貴女の初恋の話でも聞かせて貰おうかしら」

「ええっ、それはちょっと……」私は目を丸くする。「先生のご期待に応えられる様な、面白い恋の話なんてありませんよ」

「切ない恋の話でも大丈夫よ」

「参ったなあ」

錆び付いた歯車が、緩やかに動き始めた気がした。あれは小学六年の頃の記憶だ。初恋と呼べるかどうかは微妙だけれど、恋、という言葉を聞く度に、私はいつもあの少年の姿

を思い出す。

先生はメモ用紙とペンを鞆から取り出し、私に見えない様に何かを書き折り畳むと、膝の上に乗せた。

「いい？ この紙には、ある物の名前が書かれているの。それが何かを当てるゲーム。勿論それだけじゃそれが何なのかは永久に当てられないでしょうから、答えを推理する材料を得るために、貴女は私に対して幾つか質問をする事が出来る。私はイエスカノーでそれに正直に答える」

「あっ、それって、二十の扉ってやつですよね」

「但し、質問回数は十回までよ」

「十回ですかあ」

小学校時代よくこのゲームで遊んだとは言え、十回で当てられた事は無かった。稚拙だった当時は下らない質問ばかりぶつけてしまい、随分と質問回数を無駄に消化してしまった事が多かったのだと思う。今なら大丈夫だろうか。

「それともう一つルールがあるわ。楠木さんの質問がもしイエスなら貴女から私に、ノーなら私から貴女に、それぞれプライベートな質問も浴びせる事が出来るの。題して『十と心の扉ゲーム』よ」

「先生が考えたんですか？」

意外と子供っぽいかも知れない。「それとも、あるピアニストの受け売りですか？」

「駄目。イエスなら教えてあげる」そう言っただけで先生はウィンクする。

「よし、それじゃあいきますよ。ええつと……それは、手に持てるほどの大きさの物ですか？」

「イエス」

「いきなりビンゴですね。『十と心の扉ゲーム』は先生が考えたんですか？」

「そうよ。どうしても仲良くなりたい人や、片想いの人が居たら、このゲームを使うといわ。さあ、次の質問をどうぞ」

「二つ目ですね。それは、食べ物ですか？」

「ノー」先生はゆっくりと首を横に振った。「ご両親はご健在？」

「いいえ。父も母も祖父母も、あの震災の日亡くなりました。五歳までは神戸に住んでいました」

「そうだったの……ごめんなさい」

「いえ、気にしないで下さい。一人ぼっちになった私を、千登勢に住んでいた叔父夫婦が面倒見てくれる事になって、それでこちらに住む様になりました。その叔父夫婦は今も元気です」

話していて、あの震災の日からも十五年も経っている事を思い出す。地震の記憶も、大切な人々を失った哀しみも、もう覚えていない。あの出来事だけが丸ごと切り取られ、タイムカプセルにでも押し込められている様に。いつかカプセルを開け、その時の事を思い出す日が来るだろうか。

先生は哀しげな表情で視線を落とし続けている。私は明るい顔で、

「三つ目の質問、いきますね。それは、お店で売られている物ですか？」

「イエス。百円ショップでも買えるわね」

「なるほど、結構安いですね。……先生は海外で暮らしていたそうですが、どこの国で生活されていたんですか？」

「オーストリアよ」

「わあっ、音楽の国ですね」

脳裏にアマデウス・モーツアルトの顔が浮かんだ。もしかするとゲームの答えは、音楽に関係する何かだろうか。と言っても、百円ショップでも売っていきそうな楽器といえば、ハーモニカかカステネットぐらいしか思い当たらない。

「ウィーンでね——」先生が懐かしそうに目を細める。「家庭を持った事もあるの」

「えっ、先生って、結婚されてたんですか？」

「ええ。結婚した彼は、私を幸せにしてくれる人だったわ。娘も生まれて、幸せな生活を送っていた。でも世の中、なかなか思い通りにはいかないものね……」

「何か、あったんですか？」

「それは次の質問次第」

「ずるいなあ」私は次第に身体が熱くなってゆくのを感じた。「では四つ目、いきますよ。それは、音楽に関係する物ですか？」

「ノーです」

「うーん、いい線行ってると思ったんですけどね……」早まって条件を限定し過ぎた。知りたい事は山ほどあるのに、無駄に回数を消化してしまった。

「今のお仕事は楽しい？」

「はい。勤め始めは雑用ばかりやらされていたんですけど、今は充実しています。特に初仕事が姫川先生の担当編集者なんて、光栄です」

「煽^{おた}っても何も出ないわよ」

先生は両手を広げて見せた。「五つ目、どうぞ」

もう折り返し地点まで来てしまった。百円ショップに売っている、手で持てる大きさの、食べ物では無い物。形すら思い描く事が出来ない。五つ目はもう少し慎重にいかなくては。

突然閃いて、私は尋ねた。

「それは、遊び道具ですか？」

「ノー」

車内放送が白波^{しらなみ}駅到着を告げ、私と先生は殆ど同時に窓の外を見た。ゲームに夢中になっていて全く気付かなかったが、列車は止まっている。

「点検の為、十分間停車します」

初老の車掌が乗車口より顔を覗かせた。駅構内にある時計は五時五十分を指している。

「一休憩しましょうか」先生は。ボタンと本を閉じるかの様に、両手を合わせた。

「お茶、切らしてしまいましたね。売店でコーヒーでも買って来ましょうか？」私はハンドバッグを手に、立ち上がった。

「私は、紅茶がいいな」先生は千円札を差し出した。

「そんな、私が出しますから」

「いいのよ。奢らせて」

お茶菓子もついでにね、と先生は微笑んだ。

私は深々と頭を下げ、その千円札を片手にホームに降り立った。ゲームも折り返し地点だが、この白波駅も千登勢と菜倉を結ぶちょうど半分の所に建っている。白い波という名前がついているのに、この土地に海は無い。この「波」と言うのは海の波の事では無く、方角の「南」が訛った物だという説もある。山梨県が「山那智やまなち」という言葉が訛ったものだと言われているのと同じ。いつか私の住んでいる千登勢も、別の名前に変わってしまうかも知れない。

菜倉までは意外に長旅だ。この駅で一息つく乗客が多く、キヨスクは賑わいを見せている。そう言えばこの「キヨスク」という言葉も確か、「気安く」が訛った物だった気がする。売店の列に並びながら、先程のゲームの答えを推理する。遊ぶ物では無い。となると仕事に使う物だろうか。しかし「仕事に使う物ですか」と尋ねても、何となくノーの様な気がするのだ。

交錯している合間によりやく私の番になり、缶のコーヒーと紅茶、そしてクッキーと塩煎餅を購入する。

ふと見覚えのあるデザインを視界に捉えた気がして、週刊誌などのコーナーに目を移すと、片隅に数冊の本が積まれていた。それは昨晚私がずっと読み耽っていた先生の著書、『空谷の登音』だった。

——彼女は奏でる。月の出る夜を、雨の降る夏の夜を、雪の降る聖夜を。突然イメージの波に呑み込まれ、やがて鮮明になっていく。冬の街。幼い頃の私。冷え切った私の右手を、温かい手が握りしめている。お母様？ お父様？ それとも、お婆様？——

これが『空谷の登音』の印象的な書き出し。

才能溢れる十四歳の少女・アンネが、コンサート会場でピアノを披露するシーンから始まる。アンネは世界的な交響楽団の一員として活躍しているが、幼い頃の記憶を全て失っていた。ただ、ある曲を弾いている時だけ、彼女は失った記憶の断片を心に取り戻す事が出来るのだ。

記憶を回復するために、一樣にその曲を奏で続けるアンネ。イメージの中で自分の右手を引いているのは、やがて父親でも母親でも無く、幼馴染みの少年である事が判明する。戦争で故郷が焼け野原となり、家も家族も失った後、吹雪く街で倒れていたアンネを救ったのが、この少年だった。

しかし何百回この曲を弾き続けても、アンネは少年の顔も名前も、その後彼がどうなったのかも、思い出す事が出来なかった。確かなのは彼が幼馴染みという事と、少女が弾いている曲はこの少年から教えてもらった曲だという事だけだった。

やがて十八歳になった彼女は、別の交響楽団に所属するチェリスト・ヨハンからプロポーズされる。俗に言う一目惚れである。アンネの方もヨハンの優しさに次第に惹かれてゆき、少年の事を諦めプロポーズを承諾する。

彼女の楽団とヨハンの楽団はライバル同士であったため、二人が結婚する事を、アンネの育ての親である団長は許さなかった。二人は何度か密会を重ねるが、ヨハンの所属する楽団が急遽国を離れる事となり、別れを余儀なくされる。

二人の最後の夜。アンネは待ち合わせ場所に向かう途中、ヨハンの楽団の者に呼び止められる。そこでヨハンも幼い頃の記憶を無くして、幼馴染みと一緒に雪の街を歩いた事だけが心に残っているという事、そして楽屋にこもって毎日同じ曲をチェロで奏でている事を聞いてしまう。

アンネとヨハンは、誰も居ないコンサート会場で落ち合う。お別れに自分の一番愛する音楽を演奏しようと話すヨハン。アンネは封印していたあの曲を奏でる。ヨハンも毎日弾いていた曲を奏でる。彼の演奏が終わった時、二人は何かを感じ取った。今度は同時に弾いてみようという事になり、二重奏が始まる。美しく重なり合うハーモニー。この音楽はピアノとチェロ、二つのパートで一つの音楽だったのだ。

だが、物語はここで終わらない。

アンネはヨハンこそが自分を救った幼馴染みの少年なのだと確信し、劇団を辞め、ヨハンと共にこの国を離れる事を決意。そして結婚する。

それから六十年の歳月が流れ、アンネとヨハンは余生を静かに過ごしていた。その時、一組の老夫婦が彼女を訪ねて来る。男の方はヴァイオリンを、女の方はヴィオラを持っていて、一曲のメロディを披露する。それはかつてアンネとヨハンが奏でたあの曲だった。二人が演奏に加わると、完成された音楽へと様変わりした。そう、この音楽は二重奏では無く、四重奏だったのだ。

演奏が終わった瞬間、四人の記憶は蘇る。この四人は子供の頃、同じ音楽教室に通っていて、クリスマス発表会のためにオリジナルの四重奏曲を作っていた。だが悲運な事に、グループ発表直前に空襲が起きてしまい、四人は散り散りとなってしまった。

アンネとヨハン同様、やはりこの老夫婦も冬の街でお互い助け、助けられの仲だったという。しかしそこでアンネは気付いてしまうのだ。訪ねて来た老夫婦の男性の左手に深く刻まれた傷跡を。記憶の中で自分の手を引いていた幼馴染みの左手にも、同じ傷跡が刻まれている事に――。

アンネがこの後どういう行動を取ったのかまでは描かれていない。私がこの物語を読み終え、本を閉じた瞬間、絵も知れぬ読了感を味わった。

個人的にはアンネよりもヨハンの方に感情移入してしまい、冒頭で示されていた音楽が二重奏であった事が判明した瞬間に、喉の奥底から込み上げてくる物があった。ああやっぱりそうか、ヨハン良かったね、アンネの想い人が貴方で良かったね、と声に出してまで語りかけそうになったものだ。残りの五十ページはその後の二人が描かれるのかなと思つて蓋を開けてみると、その曲が実は四重奏で、そのさらに向こう側にまでストーリーが用意されていたという事に、心が動かされずには居られなかった。

この『空谷の登音』は彼女のデビュー作ではあるが世間からは意外と評価されず、帝東新人賞を受賞したのはこの本の一ヶ月後に発刊された二作目『スーベニア』の方らしい。

私は席に戻り、先生に紅茶の缶を手渡した。

「楠木さんは、いつも夜寝る時はどんな服装で寝るの？」

先生はプルトップを開けながら尋ねた。私は驚いて「えっ？」と目をぱちくりさせた。

「ゲームの続き」

「ああ、そうか。遊び道具ですかという質問はノーでしたね」

私は返答に困る。「いえ、普通に……パジャマです」

「今日も？」

「ええ、まあ」

「そうなの？」先生は呆気にとられた表情になる。

「……では六つ目の質問です。これは自信があるんですよ」

私は缶コーヒーに口をつけた。「もしかしてそれは、お料理に使う物ですか？」

「残念ながら、それもノーです」

「あれ、おかしいなあ……」

百円ショップに売られている物で食べ物でも遊び道具でも無いとすれば、調理器具かも知れないと思ったが、あてが外れた様だ。となると文房具か、生活用品か、インテリア関連か……後は何だろうか？

「お休みの日には何を？」

「そうですねえ、読書かゲーム……後はペットと散歩するぐらいですね」

「何を飼っているの？」

「ダックスフントを。まだ子犬ですけど。名前はチロと言います」

「一度見てみたいわ」

「はい、是非今度——」

と言いかけて私は言葉を切る。私は何を考えている？先生の言葉は社交辞令に決まっている。先生とはあくまでもビジネス上の関係。今はこうしてゲームで遊んでいても、私は単なる編集者、彼女は売れっ子作家。その関係が崩れる様な事があってはならない。今思えば、随分この列車に居る間、先生のプライバシーにズケズケと入り込む様な真似を何度もしてしまった気がする。もう少し弁^{わきま}えた方がいいのかも知れない。

「七つ目の質問をどうぞ」

先生の言葉と発車のベルが重なった。扉は静かに閉まり、列車は再び生を吹き込まれる。ようやくこの車両に他の乗客が現れた。私が売店で買い物をしている間にやって来たのか、既に席に着いてすやすやと眠っている。サラリーマン風の中年の男。通勤にこの列車を使っているのか、スーツ姿だった。

「七つ目、いきますね。それは家事に関係がありますか？」

「イエスね」

やっと一歩前に進んだ！料理に関係しないのだから、残りは掃除か洗濯しか無い。

「先生のさつき言った『あるピアニスト』って、どんな方ですか？」

「ウィーンでの事は、いいの？」

「ええ……」なるべくプライバシーに関わらない程度で質問する事にしようと思った。

「その人はピアニストと言っても、プロでは無いの。勿論レベルは高いし、一時期は目指していたんだけど、趣味の領域で留める事にしたみたい」

「何だか、勿体ないですね。どうしてプロを目指さなかったんでしょうか？ピアニストって素敵な職業なのに」

「楠木さんは誰かの影響を受けて、自分の生き方を変えた事はある？」

逆に先生が問いかけた。私は首を傾げる。「人の生き方には二種類存在する。自分がこうと思った生き方を最後まで貫き通す人と、他人の影響を受けて自分の生き方を変えてし

まう人。傍から見れば前者の方が強い人間と言えるでしょう。それでも彼を見ているとそうは思わないわ。自分の意志を貫き続ける事って、生き方を変えられない弱さなんだって思うの。誰かのために生き方を変え、誰かのために生きる事は、決して弱い事じゃ無いわ。例えば……愛する人のためにね」

「なるほど、愛する人のため、ですか」

昨夜本を読み終えた時の様に、ぼんやりとした浮遊感が私を包んだ気がした。

「……その人は今、幸せに暮らしていますか？」

「ええ。とつても」

先生は軽く口元を上げ、微笑んだ。

「八つ目の質問です。それは、お掃除をする時に使う物ですか？」

「イエス」先生は躊躇いなく答えた。

「先生がデザインをされたり小説を描かれたりしているのは、やっぱり先生の命を救ったというその大切な人の影響を、受けているからですか？」

「いいえ。彼女に会ったのはたった一度きり」

「彼女？ 女性なんですね」

「ああ、不覚だわ、口を滑らせてしまったみたい……」

先生は軽く髪に触れ、苦笑いを浮かべた。「芸術ってね、お金儲けをしたり、有名になつて世界に名を馳せたり、そんな目的のために用意された分野では無いと思うの。かけがえの無い誰かのために、それはある様な気がする。例えば愛する者のため、自分の命を救ってくれた者のため、家族のため、自分自身のため……。ピアノストの彼は愛する人のために生き方を変えた。それを見て、私は彼女のために生き方を変えようと思った。今までに出逢った人の中でたった一人、メッセージを伝える人を選ぶ事が出来るとしたら、私は迷わず彼女を選ぶわ。……彼女が居なければ私は、ピアノを弾いたり物語を創ったり出来なかった。今こうして楠木さんとゲームをする事も出来なかったから」

「では私も、その方に感謝しなければいけませんね」

私は心からそう思う。「大切な人にメッセージを送るために、手紙や電話など直接的な手段では無く、芸術を選んだ理由は一体何ですか？」

「回りくどい？」

「いえ、決してそんな事は……」

「いいのよ、妹にも言われた事があるわ。顔も名前も分かっているのに、どうして彼女が今どこでどうしているのかを調べて、直接手紙を描かないのかって」

「どうしてです？」

「簡単な事よ」

先生は人差し指を立てた。「世の中思い通りにいかない方が面白いもの」

少し身体が揺れた。否、列車が揺れたのだ。今走っている柵部という地方は地盤が悪く、曲がりくねったレールが通されているため、乗り物酔いに弱い人は十秒足らずでダウンすると云われている。先生は表情をまるで崩さない。車酔いには強そうだ。

向こう側で眠っているサラリーマン風の男は少し体制を崩し、また立て直し、を繰り返している。だが起きる気配は一向に無い。

「質問は、もう九つ目ですね」

幾つかの掃除道具が頭に思い浮かぶ。「それは、拭き掃除の時に使う物ですか？」

「凄い」先生は目を丸くする。「イエスよ。もう分かったんじゃない？」

「いえ、拭き掃除と言っても色々ありますからね……」

そう言いながら、既に頭の中ではタオルか、雑巾か、モップに絞られていた。

「ピアノからウェブデザインへと芸術を切り替えたのは、何故ですか？」

「別にピアノに限界を感じたからという訳では無いの。帰国した後、七曲ほど作曲をして、自分でCDも作ってみたけれど、ああ、これじゃ届かないな……ってふと思ったのよ。そんな時、私が趣味で作っていたホームページを見てメールをくれた人が居てね。その人何ヶ月か文通をしていたら、会社でウェブデザイナーの人手が足りなくて困ってる、ピンチヒッターで来てくれませんか、ってお誘いが来て」

「それで、ウェブデザイナーになられた訳ですね」

「ええ。コンピュータを使った仕事は予想以上に面白かったわ。モニタに向かってカタカタとキーボードを打ち鳴らす作業は、ピアノと似ているでしょう。この十本の指で、作品を紡ぎ出してゆく」

「そう言えば先生の芸術には、指を使うものが多い」

「そうね。でも他の芸術と違うのは、やはり所詮仕事は仕事でしか無い、という点かしら。ピアノも絵画も小説も、自由に表現が出来るけれど、ウェブデザインには制約がある。あと、クライアントの注文もね」

「あー、口煩いクライアントとか、居ますもんね。センスが悪いくせにやたら訂正しろ訂正しろ、と文句を言ってくる頑固親父の様な人とか。折角作った物に対して、そういう口出しされるのって、先生にとっては辛かったんじゃないですか？」

「お金を貰っている以上文句は言えないけれど、ちよつとムツとは来るわね」

「ですよねえ」それが人間と言う物だ。「その文通相手の方とは、先生が会社を辞められた後も交流があるんですか？」

「ちよつと喧嘩別れをしてしまって、もう連絡は取り合っていないの。風の噂では同僚の方と結婚されたとか。『姫川美幸』はその文通相手がつけてくれたハンドルネームだから、もしかしたら本屋さんの店先で、おっ、とびっくりしてるかも知れないわ」

「あれっ、本名じゃ無かったんですか」

まるで気が付かなかった。編集者が聞いて呆れてしまう。「意外……でも無いですけど、先生って本当にお姫様ってイメージがぴったりなんですよね。それでその名前になったのかな……」

「インパクトはあるでしょう？」

「ええ、確かに。でも、姫以降の部分はどこから来たんでしょう？」

「演歌歌手の名前に似ているわね。ファンだったのかしら。……さあ、最後の質問をどうぞ」

私は意を決して尋ねる。

「それは、布で出来ていますか？」

「ノー」

「えっ」私はあんぐりと口を開いた。「うーん、ノーですか……」

「布で出来たそれは、少なくとも私は見た事は無いわね。さて、私もこれが最後の質問よ、

楠木さん」

「はい」

一体どんな質問が飛んで来るのだろう。私は心の中で身構えた。

「これは質問と言うより、貴方とこうしてゲームをしていく内に、どうしても確かめてみたかった事よ。もしかしたら貴方は、怒るかも知れない。いいえ、きつと怒る。それでも私には尋ねずには居られないの。ごめんさい、先に謝っておくわ」

先生は唇を動かしながら、やや俯き加減になる。よく意味が解らなかったが、私の口は毒牙に痺れた様に、ピクリとも動かす事は出来なかった。

「それは、貴女の鞆のこと」

先生は私のハンドバッグを指差した。「一泊の旅行なのに荷物が軽すぎる。気になって楠木さんが缶コーヒーを買いに行く間、中を確かめさせて貰った。睡眠薬が二箱入っているでしょう？ 二つの箱の日付は、今日と一週間前。一週間前の方は全く手つかずだった。あえてそれは飲まずに、今日新しい薬を受け取ったのね。もしかしたら貴女は、二倍以上の量を一度に服用しようとしていたんじゃないかしら」

「それは……」

「でも自殺をするために、それだけの量を飲む訳では無いと思った。ゲームを続けていく内にそれをする理由が貴女には無いと分かったもの。そこで、楠木さんが戻って来た時、夜はいつもどんな服で眠るの、って私、尋ねたでしょう？ 貴女はパジャマと答えた。ホテルの浴衣は使わない。そうなると、やっぱりその荷物の量はおかしいわ。一泊だけの旅行だから着替えは用意していないのかな、とも思ってたけれど、でもせめて寝る時には寝間着を用意する筈じゃない？」

「私、私は……」

先生の大きな瞳が、たじろぐ私を捉えて離さなかった。

「貴女はあの震災の日から、一度も眠っていないのね」

*

タイムカプセルは開放された。

沈む足下。赤い街。父と母のひしゃげた顔が、どんどん炎に吞み込まれてゆく。その地獄の前に、私は何を思い、何を叫んだらう。逃げ惑う人々。助けを求める人々。微動だにしない人々。目の前で黒い塊へと形を変えてゆく人々。

覚えていなかった訳では無い。ただ私は思い出す事を封印した。そして眠れなくなった。十五年間一度も眠っていない。街は順調に復興しても、私は永遠に癒されない。

*

「先生の言う通りです」

私はハンドバッグを開き、睡眠薬の箱を手取る。「あの日以来、目を閉じていても眠れない日々の連続でした。何十時間、何百時間起きていても、疲れていても、一向に睡眠薬は襲っては来ないのです。何度も医者に掛かり、ありとあらゆる睡眠薬を試しました。ア

ルコールに頼っても駄目でした。どんな方法も一向に、一向に効かないんです。……もう薬の量を増やす事でしょうか、私には対応出来なくなってしまうんです」

「でも、いけない事だわ」

「ええ、分かっています。これだけの量を服用すれば、眠るどころか死んでしまうかも知れません。……それでも眠れないというのは、そうした覚悟を決めざるを得ないぐらい、辛い事なんですよ、先生。皆が楽しい夢を見ている間、しんと静まりかえった部屋で、ただ一人ぼつんと目を開けたまま毎日毎日何時間もの夜を過ごさなければいけない。その気持ち、先生には分かりますか？」

私は乱れた呼吸を整えながら、睡眠薬の箱を握り潰す。先生は何も言わなかった。

「眠れる物なら眠りたいですよ。どうしても私は眠る事が出来ないの？ どうして……どうしてっ！」

次々と溢れ出る感情を、抑えきれなかった。

震える私の手を、先生は優しく握り締める。「そのために、私が来たのよ」

「どういう意味……ですか？」

「ゲームはまだ終わっていないわ。答えはもう、分かるでしょう？」

私は約五秒間、その手を見つめ続ける。

そして答えは何故か、突拍子も無く、浮かんだ。

「バケツ、ですね？」

「正解よ」

先生は柔らかな手で、私の頬に触れる。その手はとても温かかった。

「目を閉じて、思い出してみて。あの震災の日、貴女は真っ白なジャンパーを着ていた」

私はまるで先生に操られているかの様に、ゆっくりと目を閉じた。瞬時に心へと流れ込んで来る映像。白いジャンパーの少女（……確かにこれは、私だ）。ふらふらと、瓦礫の街を彷徨い歩く少女（……そう、私）。現在の私が、過去の私を見ている。

——貴女は瓦礫の中を歩いている……。

先生の声が、途端に遠くなる。

私の意識は、いつしかイメージの街へと飛び込んでいた。

*

何もかも失った私。

これからどうしていいのか分からない。

何処に行けばいいのか分からない。

ここに居なさい。絶対に離れちゃダメだ。

隣のおじさんにはそう言われていたけど、

それでも私の足はひとりでに動き出す。

児童公園へ向かう近道は泥だらけ。

破裂した水道管から噴き出る水が足下を濡らし続ける。

ざぶざぶ進む私。

すぐ近くで呻き声を聞いた気がした。
私は振り返る。

人影は無い。

でも微かな声。

私のすぐ足下から。

そこに、いるの？

わたしは、ここよ。

どちらの言葉がどちらの声なのかは曖昧だった。

私は辺りを見回す。

瓦屋根の残骸が沢山転がっている。

もう声は聞こえなくなってしまうた。

私は瓦礫の隙間に出来た小さな穴の中を覗き込む。

苦々しげな女性の顔が見えた。

おねえちゃん。

おねえちゃん！

動かない。

たすけなきや。

私は何度も叫ぶ。

しんじやだめ！

うっすら目を開く彼女。

丸い大きな瞳。

私は、闇の中にそっと手を伸ばす。

彼女の手が、私を掴んだ。

だいじょうぶだからね！

ぜったいぜったい、たすかるからね！

*

先生の手が頬をそっと離れ、私の意識は再び元の世界へと引き戻される。

「震災はその女性が偶然神戸の実家に戻っていた最中の出来事だったわ。祖父母と一緒に居間で眠っていた彼女をあの大地震が襲った。瓦礫の下敷きになり、薄れゆく彼女の意識をこの世界に呼び戻したのは貴女の声だったの。そしてその声に気付いた救急隊員によって、女性と祖父母は救出された」

「まさか……」

散り散りになっていたジグソーパズルの最後の一片が今、完全に嵌ったのを感じた。「あの時貴女が助けたのは、私だったのよ。救急車で運ばれる前、私はその女の子に名前を訊いたわ。その凜とした声は今でもくっきりと心に残っている。クスノキトモミと名乗る貴女の声が。……『空谷の聲音』と同じ。貴女を苦しみから救うためには、この記憶のパーツが抜け落ちていたの。楠木さんは私の命を救ってくれた、私にとって大切な人。やっと逢えたわね」

「……先生」

一雫の涙が私の膝を濡らした。「私、時々こう思うんです。父や母、祖父母の命を、私は助ける事が出来なかった。ずっと眠れなかったのはそれに対する私の罰だったんだろう、って……」

先生はゆっくりと首を横に振った。

「貴女は大切な記憶まで纏めて封印してしまっただけ。人はね、美しい思い出が無いと前には進めないのよ」

私は手の平で涙を拭い、ぼんやりと窓の外を見つめる。誰かの影響を受けて生き方を変える強さが、私には無かっただけなのかも知れない。

列車が最後のトンネルを抜け、煌めく菜倉の夜景が姿を現す。窓に映る先生の美しい表情が移ろう景色と重なり、風も吹いていないのに栗色の髪がふわり舞った気がした。

*

先輩の言った通り、姫川先生は不思議な人だ。

ゴーストライターの噂は相変わらず絶えないけれど、今度発売される先生の七冊目の著書のタイトルの頭文字が「ミ」では無かった事が、間違いなくあの先生の作品なのだと思いに確信させた。それは先生と私だけが知っている秘密のメッセージ。そして、世の中思い通りにいかない方が面白いという事。

あれから一ヶ月。私はまたあの枇杷の前を歩いている。勢いを増した木枯らしが樹木を揺らし、花びらは次々虚空へと散ってゆく。眠れぬ夜の呪縛から解放された、それは私の様だった。

——了